

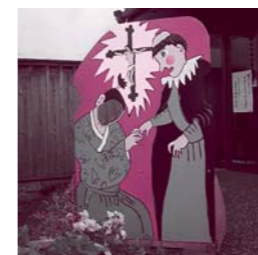
四條畷市立
歴史民俗
資料館
(四條畷市)

みゅ〜
ザ・見遊じあむ

.....67



東高野街道沿いの住宅地にあります



キリシタンの歴史も
アピールしています

四條畷市には5世紀の古墳時代に、馬を飼育する大きな牧場がありました。南北朝時代は楠木正行(正成の息子)の合戦があり、安土桃山時代にはキリシタン大名の領地になるなど、市内には多様な歴史の遺物が残っています。まちを南北に縦断する東高野街道沿い

白壁の蔵に

日本最古の遺物も収蔵

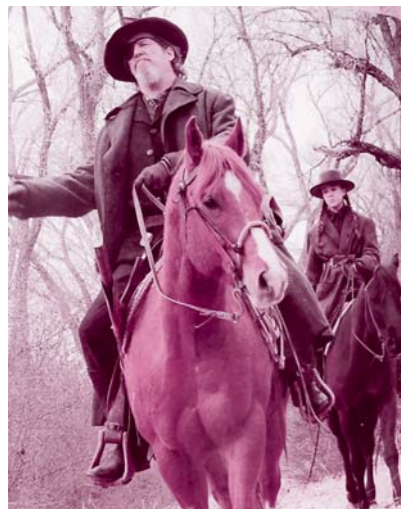
に建つ白壁の和風建築物が、市立歴史民俗資料館です。展示室になつている蔵は1899年(明治32年)に枚方区裁判所の出張所として建てられました。その後は法務局の書庫としても使われ、2006年に国の

登録有形文化財に指定されました。資料館は、この蔵を囲むように増築され、全体として「白壁」と「蔵」をイメージした建物になっています。小さな資料館ですが、近辺で発見された日本最古の遺物が2点(古墳時代に馬飼集団が祭祀で使用したとされる「木製下駄」

と、安土桃山時代に城主が建てた「キリシタン墓碑」を収蔵されており、歴史研究者にとっては全国でも有名な資料館になっています。

ミュージアムメモ

▶所在地/四條畷市塚脇町3番7号▶交通/JR学研都市線「四條畷」駅下車北へ徒歩約13分▶開館時間/午前9時30分~午後5時▶休館日/月曜日、年末年始▶入場料/無料▶連絡先/電話072-878-4558



「トウルー・グリット」

とにかく久しぶりの西部劇です。最近は何年にもないぐらいのジャンルだけに西部劇ファンにはさびしい限りです。2009年に「ノーカン トリー」でアカデミー作品賞をとったジョエルとイーサン のコーエン兄弟の監督、製作、脚本です。

執念と気性に負けて本気に。14歳の少女には過酷すぎる旅が始まります。少女が辿る過酷な行程を、コーエン兄弟ならではのユーモアを織りこみリアルな語り口と素晴らしい映像で描き出し ていきます。保安官にジェフ・ブリッジス、レンジャーに マット・デイモン、14歳の少女にはみごと今年のアカデミー賞助演女優賞にノミネートされた新星、ヘイリー・スタインフェルド。

詩情と追跡の
西部劇が復活

「真の勇氣」

このシネマ

ガレいナ

大阪の
戦跡を歩く

第66歩



柴島浄水場壁面の弾痕
(大阪市東淀川区)

1945年(昭和20年)6月、東淀川区は3度にわたって米軍機による空襲を受けました。特に6月7日の空襲は激烈を極め、1トン爆弾や焼夷弾が降り注ぎました。米軍機は低空の機銃掃射も繰り返し、柴島浄水場の壁面に約50

メートルにわたって弾痕を残しました。この空襲を忘れまいと、地元の人々が弾痕でえぐられた壁面の一部を保存しています。立て札には「傷つき、死んでいった、物言わぬ多くの人々への生き証人」と記しています。

撰津

河内 和泉 三國誌
おおさか

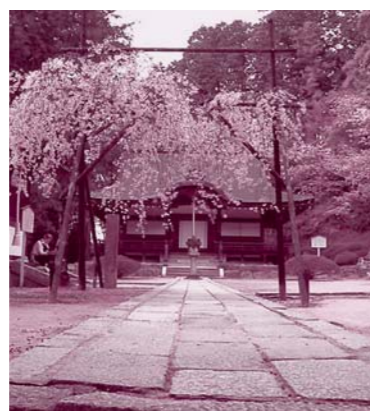
67

(河南町)

西行法師と弘川寺

「願はくは、花の下にて春死なむ」
旅と草庵で生涯を終えた歌人

西行といえば、激動の平安末期の時代を生きた歌人として有名です。「願はくは花の下にて春死なむ そのきさらぎの望月の頃」という歌のとおり、春に桜の下で生涯を終えた場所が、現在の河南町にある弘川寺です。紀伊の国(現在の和歌山県)で生まれた西行は、京都で御所を警備する「北面の武士」となり、文武とも優れた青年と言われていましたが、23歳で妻子を捨てて出家。72歳で亡くなるまで、ひたすら旅と草庵と歌に明け暮れる生涯を過ごしました。鎌倉時代に編纂された「新古今和歌集」には、西行の詠んだ歌が94首と、もっとも多く収められ、「天成の歌人」とも評されました。



桜の季節になると、多くの人々が訪れます

保元・平治の乱から平家の滅亡へと激動する時代に、仏の道への憧れと現世への執着に揺れながら、花や月への深い思いを歌い続けた西行の生き様は、数々の「西行伝説」を残しました。現代においても西行は、吉川英治の「新・平家物語」や白州正子の「西行」、辻邦夫の「西行花伝」、火坂雅志の「花月秘拳行」など小説や随筆にも描かれ、人々を魅了しています。西行終焉の地である弘川寺は西暦665年に役行者によって創建されたといわれ、行基や空海も修行しました。寺には、西行が結んだ庵が再建されています。桜の花が咲きこぼれるこの4月、西行が亡くなったこの場所へ多くの人が参拝に訪れます。

さつき待つ花橋の香をかげば
昔の人の袖の香りぞする

よみ人知らず(古今和歌集)

「5月を待つて咲く橘の花の香りをかぐと、昔の恋人の袖に炊き込めていた香りが思い出される」という意味で、「伊勢物語」にも登場します。宮仕えに精を出す余り、男は妻のことを顧みなかった。妻が男のもとを離れていってはじめて、男は妻を心から愛していたことに気づくが、時はすでに遅かった、と今日でもよくあるストーリーです。

いまも心に響く
名詩・名歌・名語録

天災は
忘れられたる頃来る

寺田 寅彦

戦前の物理学者・寺田寅彦(1878~1935)の言葉とされ、碑文が寺田の出身地である高知県にあります。寺田は著書「天災と国防」の中で「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防御策を講じなければならぬ」と、対策を怠る政府や社会に警告を発していました。